

# グラックス改革と民衆

——コンティオをめぐる近年の研究から——

足立 恭平

## はじめに

近年の共和政ローマ史研究において、政治と民衆の関係は重要なテーマの一つとなっている。従来民衆は政策決定過程において受動的な存在であると考えられてきたが、これに対しミラーは1980年代に民衆の積極的政治関与を主張する研究を発表した<sup>1</sup>。この問題提起以後、政治と民衆の関係については盛んに議論されてきたが、それらの議論の考察時期は使用する史料の偏りにより前1世紀に集中している。他方、本稿で扱うグラックス改革が共和政ローマ史上の大きな画期であることは論を俟たず、これまでも様々な角度から研究がなされてきたが、その改革に対して民衆がどのように関わったのかということについては未だ考察が不十分であると言えよう。そこで本稿では、ミラー以後の新たな政治史研究の成果を踏まえ、グラックス改革当時における政治と民衆の関係を把握しようと試みる。本稿は、その論証を通じてグラックス改革のこれまで注目されてこなかった側面を明らかにすると同時に、政治と民衆の関係についての議論にも新たな視点を提供することを目指すものである。

本稿にとって非常に重要な視点となるのは、コンティオ *contio* と呼ばれる集会である。これは政務官によって開催される非公式の集会であり、そこでは民衆による意思表示がある程度許容されていたために、ミラー以後の研究において民衆が政治に対して受動的な役割しか果たし得なかったという説を批判するための根拠の一つとして近年研究されてきた<sup>2</sup>。現在では、一般にこの集会は当時の政治の進行において大きな役割を果たしたと認識されており、それ故本稿に対しても有益な視座をもたらすものである<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 本稿 30 頁参照。なお注の略号は特に断りのない限り *L'année épigraphique* に拠る。また史料の底本としては K. Ziegler (ed.), *Plutarchi Vitae Parallelae*, III. 1, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Leipzig, 1971; L. Mendelssohn (ed.), *Appiani Historia Romana*, II, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Leipzig, 1905; C. MacDonald (ed.), *Cicero*, X, The Loeb Classical Library, London, 1977 を用いた。

<sup>2</sup> F. Millar, *The Crowd in Rome in the Late Republic*, Ann Arbor, 1998, pp. 46-48; K.-J. Hölkeskamp, trans. by H. Heitmann-Gordon, *Reconstructing the Roman Republic: An Ancient Political Culture and Modern Research*, Princeton, 2010, pp. 101-106; 砂田徹「雄弁家と民衆——帝国形成期ローマの政治文化」本村凌二他編『岩波講座世界歴史 5 帝国と支配——古代の遺産』岩波書店、1998 年所収、235-236 頁; 米本雅一「キケロの『コンティオ』と共和政末期ローマの政治文化——修辞学テキストの中のコンティオ」『西洋史学』233、2009 年、20-23 頁。なお同じく民衆の集会である民会 *comitia* においては、民衆に発言権は無かった。平田隆一「ローマの民会——その特質・形成・展開」『西洋史研究』21、1992 年、150-61 頁。

<sup>3</sup> コンティオの制度に関しては、砂田前掲論文、229-236 頁や米本雅一「コンティオの聴衆——共和政ローマの政治文化における政治と民衆」『文化史学』59、2003 年、151-155 頁が詳しい。Cf. K.-J. Hölkeskamp, 'Oratoris maxima scaena: Reden vor dem Volk in der politischen Kultur der Republik' in M. Jehne (ed.), *Demokratie in Rom?: Die Rolle des Volkes in der Politik der römischen Republik*, Stuttgart, 1995, pp. 11-49; A. J. E. Bell, 'Cicero and the Spectacle of Power', *JRS* 87 (1997), pp. 1-22; H. Mouritsen, *Plebs and Politics in the Late Roman Republic*, Cambridge, 2001, pp. 38-62; R. Morstein-Marx, *Mass Oratory and Political Power in the Late Roman Republic*, Cambridge, 2004, pp. 34-67.

## 1. 先行研究と問題の所在

### (1) 共和政ローマにおける政治と民衆

まず民衆という術語についてであるが、これを厳密に定義づけることは非常に困難である。先行研究において、この言葉は一般に元老院議員身分 *senatores* や騎士身分 *equites* といった政治支配層の外部にある人々、という様に想定されてきた<sup>4</sup>。さらに当時の政策決定がほぼローマ市内で行われたことから、ローマ市もしくはその近郊に居住する民衆が特に主たる考察対象となってきた<sup>5</sup>。本稿においてもこれらに倣い、ローマ市ならびにその近郊に居住する、政治支配層の外部に位置づけられる人々という意味でこの術語を用いる。なおこの民衆は、史料上 *plebs* あるいは *δημος* (*dēmos*) と言い表されることが多く、本稿においても事情は同様である。

従来共和政期における民衆による政治への関与は低く見積もられてきた。というのも従来の国制史研究において有力視されていたのは当時の国制を、権力世襲によって独占的にローマ政治を支配していた政治家たちによる寡頭政と捉える学説であったからである<sup>6</sup>。そのため民衆により組織された民会は寡頭政治家たちへの協賛機関に過ぎないという主張も時としてなされた<sup>7</sup>。だが1980年代になると、この説は民会の立法権を重視したミラーの一連の論文によって痛烈に批判されることとなる<sup>8</sup>。彼は一貫して民衆の積極的政治関与を主張しており、彼によれば、民衆はコンティオヤや見世物の場において自らの意思表明をなしうる存在であり、そのため政治家は弁論を通して民衆を説得せねばならなかったという<sup>9</sup>。最終的に彼は当時の国制は寡頭政ではなく、民衆主導の直接民主政であるという結論にまで至っている<sup>10</sup>。

ミラーによる問題提起と並んで重要なのは1987年のファンデルブロックの研究である。彼は社会学的観点から共和政末期における民衆の政治的な集合行動を検討し、そうした行動には政治家による入念な動員政策が働いていたと主張する<sup>11</sup>。この議論は民衆に配慮し、彼らに働き掛けて自らの政策実現を目指す政治家という新しい視点を提供したと言えるだろう。こうした議論によって政策決定を独占的に支配する寡頭政治家像が覆されたことにより、それまでの共和政ローマの国制理解は大幅な変更を余儀なくされ、それに関する論争が盛んに繰り広げられた<sup>12</sup>。日本においても、砂田はミラーの説を援用しながら民衆は政治家同士の競争の拠り所として帝国拡大の共犯者または帝国統治の主権者としての性格を持っていた可

<sup>4</sup> S. Hornblower & A. Spawforth (eds.), *Oxford Classical Dictionary*, 4<sup>th</sup> ed., Oxford, 2012 (=OCD<sup>4</sup>), s. v. 'Plebs'.

<sup>5</sup> N. Purcell, 'The City of Rome and the *plebs urbana* in the Late Republic', in J. A. Crook et al. (eds.), *Cambridge Ancient History*, 2<sup>nd</sup> ed., vol. 9, Cambridge, 1992 (=CAH<sup>2</sup> 9), pp. 644-647; Millar, *op. cit.*, pp. 13-48.

<sup>6</sup> M. Gelzer, trans. by R. Seager, *The Roman Nobility*, Oxford, 1969.

<sup>7</sup> この典型として E. Fraig, 'Entscheidung und Konsens. Zu den Frieden der politischen Kommunikation zwischen Aristokratie und Plebs', in Jehne (ed.), *op. cit.*, pp. 77-100 が挙げられる。

<sup>8</sup> F. Millar, 'The Political Character of the Classical Roman Republic, 200-150 B. C.', *JRS* 74 (1984), pp. 1-19; id., 'Politics, Persuasion and the People before the Social War (150-90 B. C.)', *JRS* 76 (1986), pp. 1-11. Cf. P. A. Brunt, *The Fall of the Roman Republic and Political Essays*, Oxford, 1988, pp. 12-23.

<sup>9</sup> Millar, 'Politics, Persuasion', pp. 1-11.

<sup>10</sup> Millar, *The Crowd*, pp. 197-226.

<sup>11</sup> P. J. J. Vanderbroeck, *Popular Leadership and Collective Behavior in the Late Republic (ca. 80-50 B. C.)*, Amsterdam, 1987, pp. 104-141. Cf. P. A. Brunt, 'The Roman Mob', *P & P* 35 (1966), pp. 3-27.

<sup>12</sup> J. A. North, 'Democratic Politics in Republican Rome', *P & P* 126 (1990), pp. 3-21; Jehne, *op. cit.*; Millar, *The Crowd*; Mouritsen, *op. cit.*; Morstein-Marx, *op. cit.*; Hölkeskamp, *Reconstructing*; C. Steel & H. van der Blom (eds.), *Community and Communication: Oratory and Politics in Republican Rome*, Oxford, 2013.

能性を指摘している<sup>13</sup>。

2000年代に入るとそうした個々の論点を総合した研究が現れた。例えばムーリツェンはミラーの主張は認めつつ、実際に政治に参加しえた民衆の割合はその全体に比して非常に少なかったために実質的には民主政ではなく少数エリートたちによる政治が行われていたと主張する<sup>14</sup>。またモースタイン=マルクスも民衆の政治的実力を認めながらも、やはり政治に関する知識や情報を優先的に得ることができるのは実際に政治に携わる政治家であるとし、民衆は彼らのイニシアチブから逃れることはできなかつたとする<sup>15</sup>。ただし両者ともミラーによる問題提起以前の寡頭政説に回帰している訳ではなく、時には民衆が実力行使でもって政治家たちに自らの主張を通すこともありえたために、政治家たちは政策決定を支配できていたわけではなく、決定に際しては民衆への配慮が必要であったことは認めている<sup>16</sup>。

これらの議論を受け、現在では民衆が当時の政策決定過程において全くの無力であったという理解は最早過去のものになった。ミラーの主張する程の積極的な政治関与は認められないうちにしろ、ムーリツェンやモースタイン=マルクスの議論からは、普段はそれが表面化せずとも、有事の際には政策決定過程にも深く関与しうるいわば潜在的な実力といったものが民衆には備わっていたと言えよう。そうした場合、政策決定過程において重要となるのはファンデルブロックが分析対象としたような民衆の動員政策である。

しかしこれらの民衆研究は主にキケロの著作が史料として使われることが多かったために、その考察時期は前1世紀に集中している<sup>17</sup>。だがもともとミラーによる問題提起は主に前2世紀の状況を考察対象にしたものであり、そのため彼に始まる「政治と民衆」議論はキケロ期以前にも有効なはずである<sup>18</sup>。そこで本稿ではこれらの諸研究の成果を、共和政ローマ史の大きな画期であるグラックス改革の研究へと反映させることを試みる。

## (2) グラックス改革研究史

前133年、相次ぐ戦乱によってイタリアに住む多くの者たちが疲弊し、当時の社会が重大な危機に瀕していることを見てとった護民官ティベリウス・グラックスは、その危機を脱すべく改革運動に踏み切った。彼の改革は当時政界を支配していた元老院の反対により挫折し、彼自身も暗殺されてしまうが、改革を求める勢力は生き残り、前123年に彼の弟のガイウス・グラックスが護民官に就任すると改革運動が再開した。彼の改革は兄よりもより激しく、より広範な社会・行政改革であった分反対派の反抗も強く、前121年にはガイウスもまた反対派勢力によって追い詰められて自殺を余儀なくされた。彼の死後グラックス一派は徹底的に弾圧され改革運動は消滅し、ローマは社会的矛盾・対立を内包したまま「内乱の1世紀」と

<sup>13</sup> 砂田前掲論文、241-243頁。

<sup>14</sup> Mouritsen, *op. cit.*, pp. 18-37, 128-47.

<sup>15</sup> Morstein-Marx, *op. cit.*, pp. 160-203.

<sup>16</sup> Mouritsen, *op. cit.*, pp. 141-7; Morstein-Marx, *op. cit.*, pp. 1-23, 68-118.

<sup>17</sup> これまで述べた文献のほか、Bell, *op. cit.*, pp. 1-22 や J. Tan, 'Contiones in the Age of Cicero', *CIAnt* 27-1 (2008), pp. 163-201、米本「キケロの『コンティオ』」、20-38頁等がその典型として挙げられる。

<sup>18</sup> Millar, 'The Political Character'; id., 'Politics, Persuasion'. また別の視点で前2世紀の政治と民衆の関係に迫ったものとして藤井崇「ローマ共和政中期における市民と軍務」『西洋古代史研究』2、2002年、21-38頁がある。

呼ばれる混乱期へ突入する<sup>19</sup>。

以上がグラックス改革の大筋である。これまでも多くの学者たちによって様々な角度から研究されてきたが、管見の限りグラックス改革研究において当時の民衆が問題とされた研究は未だほとんどない<sup>20</sup>。これは先述の通り当時の民衆と政治の関係の研究自体が比較的新しい分野であることが一番の要因であると思われるが、他方で従来のグラックス改革研究全体の性質もまたその一因であろう。

その性質を端的に述べれば、これまでの研究は改革制度にのみ注目し、その進行過程についてはあまり問題としなかったということである。例えばティベリウスの活動に関しては、アールなど多くの研究者が文献史料をもとに彼の制定した農地法の詳細やその動機について研究したほか<sup>21</sup>、考古学や歴史人口学の視点からも改革時の社会的状況が考察された<sup>22</sup>。またガイウスに関して、彼の多岐にわたる改革立法が逐一検討されている<sup>23</sup>。だがこれらの研究は各々非常に精緻なものであるものの、その関心は主にグラックス兄弟とその政策に向けられているため、本稿で問題とする改革と民衆の関係についてあまり多くの示唆を与えてくれるものではない。つまり、改めて両者の関係を考察する場合、従来の研究からではその実態がいまひとつ明らかにはならないのである。こうした問題は、グラックス改革を研究する

<sup>19</sup> Plu., *Ti. Grac.* 1-21; *C. Grac.* 1-19; *App. B. C. I.* 1-26. 砂田徹 『『グラックス改革』再考——前133年の出来事をめぐる近年の研究から』『西洋史論集』11、2008年、1-3頁; P. A. Brunt, *Social Conflicts in the Roman Republic*, London, 1971, pp. 76-81; H. H. Scullard, *From the Gracchi to Nero: A History of Rome from 133 B. C. to A. D. 68*, 2<sup>nd</sup> ed., London, 1963, pp. 19-30; E. Badian, 'Tiberius Gracchus and the Beginning of the Roman Revolution', in H. Temporini (ed.), *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt*, I-1, 1972, pp. 668-731; A. Lintott, 'Political History, 146-95 B. C.', in *CAH*<sup>2</sup> 9, pp. 53-77.

<sup>20</sup> 後述する H. I. Flower, 'Beyond the *Contio*: Political Communication in the Tribune of Tiberius Gracchus', in Steel & van der Blom (eds.), *op. cit.*, pp. 85-100 のみ例外。本稿 39-42 頁参照。

<sup>21</sup> 一般: D. C. Earl, *Tiberius Gracchus: A Study in Politics*, Bruxelles, 1963; P. A. Brunt, 'Review of Earl's *Tiberius Gracchus*', *Gnomon* 37 (1965), pp. 189-192; Badian, *op. cit.*; A. H. Bernstein, *Tiberius Sempronius Gracchus: Tradition and Apostasy*, Ithaca/London, 1978; D. Stockton, *The Gracchi*, Oxford, 1979, pp. 23-86. 農地法: J. S. Richardson, 'The Ownership of Roman Land: Tiberius Gracchus and the Italians', *JRS* 70 (1980), pp. 1-11; Y. Shochat, *Recruitment and the Program of Tiberius Gracchus*, Bruxelles, 1980. 動機: M. G. Morgan & J. A. Walsh, 'Ti. Gracchus (TR. PL. 133B. C.), the Numantine Affair, and the Deposition of M. Octavius', *CPh* 73 (1978), pp. 200-210; J. Bleiken, 'Überlegungen zum Volkstribunat des Tiberius Sempronius Gracchus', *HZ* 247-2 (1988), pp. 265-93. ただしこれらの区別は便宜的なものである。以下同様。

<sup>22</sup> 考古学: M. W. Frederiksen, 'The Contribution of Archeology to the Agrarian Problem in the Gracchan Period', *DArch* 4-5, 1970-1, pp. 330-357; P. Garnsey, 'Non-Slave Labour in the Roman World', in id. (ed.), *Non-Slave Labour in the Greco-Roman World*, Cambridge, 1980, pp. 34-47; C. Nicolet, 'Economy and Society, 133-43 B. C.', in *CAH*<sup>2</sup> 9, pp. 616-621. 歴史人口学: K. J. Beloch, *Die Bevölkerung der griechisch-römischen Welt*, Leipzig, 1886, pp. 370-378; P. A. Brunt, *Italian Manpower 225 B. C. -A. D. 14*, Oxford, 1971, pp. 113-120; E. Lo Cascio, 'The Size of the Roman Population: Beloch and the Meaning of the Augustan Census Figures', *JRS* 84 (1994), pp. 23-40; N. Morley, 'The Transformation of Italy, 225-28 B. C.', *JRS* 91 (2001), pp. 50-62; S. T. Roselaar, *Public Land in the Roman Republic: A Social and Economic History of Ager Publicus in Italy, 396-89 B. C.*, Oxford, 2010, pp. 191-200.

<sup>23</sup> 一般: R. J. Rowland Jr, 'C. Gracchi and the *Equites*', *TAPhA* 96 (1965), pp. 361-373; Stockton, *op. cit.*, pp. 114-205; C. Nicolet, *Demokratia et Aristokratia: à propos de Caius Gracchus: mots grecs et réalité romaines*, Paris, 1983. 司法改革: H. B. Mattingly, 'The Two Republican Laws of Tabula Bembina', *JRS* 59 (1969), pp. 129-143; A. N. Sherwin-White, 'The Lex Repetundarum and the Political Ideas of Gaius Gracchus', *JRS* 72 (1982), pp. 18-31. 市民権法案: 毛利晶 「ガイウス・グラックスの改革とイタリアの同盟者」『西洋史研究』16、1987年、45-76頁; H. Mouritsen, 'Caius Gracchus and the *Cives Sine Suffragio*', *Historia* 55-4 (2006), pp. 418-25. 穀物法: P. Garnsey & D. Rathbone, 'The Background to the Grain Law of Gaius Gracchus', *JRS* 75 (1985), pp. 20-25.

際に使われてきた史料の性格にも関係している。

本稿で主に使用する史料はプルタルコス『対比列伝』中の「ティベリウス及びガイウス・グラックス伝」並びにアッピアノスの『内乱誌』である。両者とも後代の史料であるうえ、ギリシア語を母語とする作家の作品である。だがこれらの著作は同時代史料がほぼ失われていることや他の作家たちの記述が断片的であることから、これまでグラックス改革研究において常に論述の核として用いられてきた<sup>24</sup>。ただそれでもやはりその時代の政策決定過程を詳らかに証言しているキケロの著作と比べると、その情報量は非常に乏しいと言わざるを得ず、それ故先行研究ではまずグラックス兄弟とその政策について当時の状況を復元することに主眼が置かれてきた。しかしながら私見では、これらの著作からでも政治と民衆の関係を窺うことは十分可能である。というもたしかにそれらの史料では兄弟の活動が前面に押し出されているものの、その陰で民衆の活動を示唆する記述もいくつか散見されるからである。以下ではそうした記述を基に、その関係性に迫りたい。

## 2. 史料におけるグラックス改革と民衆

### (1) 史料の問題点とガイウスのアフリカ滞在

先述の通り、本稿はプルタルコスとアッピアノスに依拠して論述を進めていくが、これらの取り扱いに際しては注意が必要である。なぜなら両者の著作は決して改革の進行を時系列に沿って叙述したものではなく、それぞれの著者が別々の執筆意図にそって史実を整理し、再構成して叙述したものであるからである<sup>25</sup>。グラックス改革の考察へ移る前に、まずは彼らの意図を斟酌し、改革のクロノロジーを正確に復元することが必要である。

この作業に当たって特に問題となるのはプルタルコスの著作である。というも彼の著作には意図的に改革のクロノロジーが改変された形跡があるからである。彼の著作中のガイウスの記述を素直に読めば、護民官の選挙は毎年の終わりに行われたことになるが、当時の国制スケジュールからするとこれは誤りである<sup>26</sup>。そこでこの記述をどのように理解するかが問題となるが、毛利はこれを彼が強引に護民官選挙を、一年を締めくくる節目にしてガイウスの毎年の活動を叙述した結果であるとする<sup>27</sup>。たしかにそうした改変をすることでガイウスの盛衰が毎年の護民官選挙の結果によって象徴的に描かれるだけでなく<sup>28</sup>、前133年の護民官再選挙時に暗殺されたティベリウスの活動も含めて兄弟の毎年の活動が護民官選挙によって締めくくられるという統一がもたらされることから、プルタルコスが意図的にクロノロジーを組み換えたと考えられる。

<sup>24</sup> A. Lintott, 'The Crisis of the Republic: Sources and Source-Problems', in *CAH<sup>2</sup>* 9, p. 2; Bernstein, *op. cit.*, pp. 231-242; Stockton, *op. cit.*, pp. 1-6; 毛利前掲論文、46-50頁。

<sup>25</sup> 同48頁。

<sup>26</sup> 護民官選挙については、夏ごろ行われたと考えられている。A. Lintott, *The Constitution of the Roman Republic*, Oxford, 1999, pp. 9-10; App., *B. C.*, 14, 58.

<sup>27</sup> 毛利前掲論文、47-48頁。毛利はプルタルコスが護民官選挙を各年の終わりに位置づけることで、ガイウスの活動について1. 護民官就任まで2. 全盛期3. 低迷期4. 敗北という構成を明確にしていると主張する。

<sup>28</sup> ガイウスの権力が全盛期にあった123年の叙述は異例の護民官再選、ガイウスが劣勢に立たされていた122年の叙述は護民官三選を目指したガイウスの落選によって締めくくられている。本稿37-38頁参照。

ただしこのことはティベリウスの活動に関してはあまり問題とはならない。というのも彼の活動は前 134 年の護民官選挙から始まり、翌年の選挙で暗殺されて終了するためにそうした改変の余地がほぼないからである。だがその活動中に 2 度の護民官選挙を含むガイウスの場合は大いに問題となる。その中でも特に本稿に深く関わるのはガイウスを巡る状況が一変し、その年の護民官選挙で落選するほどの窮地に至る前 122 年の状況である<sup>29</sup>。

この年で最もよく議論されていることの一つはガイウスの「70 日間」のアフリカ滞在の時期についてである<sup>30</sup>。これについてはプルタルコスとアッピアノスの間で矛盾がある。多くの研究者はプルタルコスの記述を信頼しているが、それによればガイウスがアフリカ植民を指揮するために現地に滞在したのは護民官選挙より前の時期となる<sup>31</sup>。だがフラッカーロはアッピアノスの記述から滞在の時期を護民官選挙の後であると主張する<sup>32</sup>。しかし、この説にはやはり無理があると言わざるを得ない。

滞在を年の後半に置く説の難点としてまず挙げられるのは、その根拠となるアッピアノスの記述が曖昧で時期について何ら明示していないことである<sup>33</sup>。アッピアノスにはガイウスが「民衆指導者の地位から転落した」後でアフリカへと出発したとあるが、フラッカーロによればこの記述はガイウスが三度目の護民官選挙に落選したことを指しているという<sup>34</sup>。しかしこの記述の前には特にこの年の護民官選挙について言及した箇所は無く、敵対派の護民官であるリウィウス・ドルススがガイウスに対して優位に立っていく様子が述べられるのみである<sup>35</sup>。それ故この箇所は護民官選挙の事を指しているというよりは、単にガイウスがこの敵対者に対して劣勢に立たされていく様子を指していると考えの方が妥当であろう。また彼はプルタルコスの 11 章の 2 節の記述にもガイウスの帰国が 11 月頃に行われた執政官選挙の近くであることが暗示されていると言うが、私見では賛同しかねる<sup>36</sup>。他方直後の 12 章を見るとガイウスが帰国後に護民官選挙のために様々な選挙対策を行っている事がはっきりと書かれているのである<sup>37</sup>。これらのことから、ガイウスのアフリカ滞在の時期を護民官選挙の前に置く説のほうがやはり妥当であると考えられる。

<sup>29</sup> ガイウスの活動期間中でも特に問題の多い年である。E. Badian, *Foreign Clientela (260-70 B. C.)*, Oxford, 1958, pp. 299-301.

<sup>30</sup> Plu., *C. Grac.* 11, 3.

<sup>31</sup> Plu., *C. Grac.* 12, 1-2. Cf. Badian, *Foreign Clientela*, pp. 300-301; Scullard, *op. cit.*, pp. 36-38; Lintott, 'Political History', p. 83; C. F. Konrad, 'From the Gracchi to the First Civil War (133-70)', in N. Rosenstein & R. Morstein-Marx (eds.), *A Companion to the Roman Republic*, Oxford, 2006, pp. 170-174.

<sup>32</sup> P. Fraccaro, 'Ricerche su Caio Gracco', in id., *Opuscula*, vol. 2, Pavia, 1957, pp. 23, 40. 日本においても、毛利前掲論文、58-9 頁がこの説を支持している。

<sup>33</sup> Badian, *Foreign Clientela*, p. 300 では、アッピアノスの記述は過度に圧縮されていて信頼に足らないとまで言われている。

<sup>34</sup> App., *B. C. I.*, 23, 102: ὁ δὲ τοῦ δημοκοπήματος ἐκπεσὼν ἐς Λιβύην...διέπλευσεν. Fraccaro, *op. cit.*, p. 23.

<sup>35</sup> App., *B. C. I.*, 22.

<sup>36</sup> Fraccaro, *op. cit.*, p. 40. たしかにここでは帰国の直後にこの年の執政官選挙が言及されているが、これは本来の時系列では護民官選挙の後に位置するはずの執政官選挙を、プルタルコスが先述の意図によりここに強引に挿入したと考えるべきであろう。というのも続く 12 章が護民官選挙落選の事を記述しており、そこで前 122 年の記述が終わってしまうため、ここに挿入しなければこの年の執政官選挙を記述する場所がなくなってしまふからである。つまり、ガイウスの帰国と執政官選挙との間には何ら関係は無いと考えられる。Plu., *C. Grac.* 11, 2-12, 8.

<sup>37</sup> Plu., *C. Grac.* 12, 1-2.

## (2) ティベリウス・グラックスと民衆

グラックス兄弟と民衆の関係を考察するための主な考察対象はコンティオと平民会であるが、これらは今回使用する史料においてはどちらも「集会」を意味する *ἐκκλησία* (*ekklēsiā*) という語で表されている。両者は民衆による投票の有無によって明確に区別できる。というのも投票による議決権を持つのは民会のみであり、コンティオにはそれが認められなかったからである<sup>38</sup>。なお平民会とは護民官によって開催される民会の一種であり<sup>39</sup>、グラックス兄弟が様々な改革立法を実行するための便としたものである。

ティベリウスの活動に関して、彼がコンティオや平民会を自身に有利に展開していたことは古典史料からはっきりと窺える。その様子が最も顕著に現れているのは彼が護民官に就任した直後の、農地法提案のためのコンティオであろう。その場において彼は自身の雄弁を遺憾なく発揮した演説を行った<sup>40</sup>。その演説は「民衆の心に響いて感動させ、共に奮起しようという気持ちと呼び起こす」効果を発揮し、彼が民衆の熱烈な支持を獲得したために反対派の政治家たちは誰も彼に対して反対意見を述べることができないうほどであったという<sup>41</sup>。また彼が農地法をめぐる対立の果てに平民会において同僚護民官であったオクタウィウスを罷免した際には、熱狂した民衆がオクタウィウスめがけて殺到するといった騒動が発生した<sup>42</sup>。これらから、彼が自身の主宰する集会において民衆の熱烈な支持を集めていたと言えよう。

だがその一方で、ティベリウスに対する反対勢力も存在した。そうした者たちの筆頭は元老院議員である。彼らの多くは大土地所有者であったため、彼による土地分配政策に対して数々の妨害工作を行った<sup>43</sup>。また元老院議員だけではなく、時には民衆の間にも反対運動が出現した。その契機となったのは先述のオクタウィウス罷免措置である。ティベリウスによる彼の罷免は、従来神聖で価値の高いものであるとされてきた護民官職の権威を冒涇したものであると捉えられ、民衆の間でもティベリウスへの不満が噴出した<sup>44</sup>。

こうした反対勢力に対して、ティベリウスは様々な配慮を実施したことが史料から確認できる。まず元老院議員に対しては、彼は当初元老院議員にも配慮して彼らの利権を過度に損なわないような宥和的な農地改革を実行しようとしていた<sup>45</sup>。しかしこの宥和措置は元老院自身によって拒否され、以後彼は元老院との対立姿勢を強めていった。他方、民衆に対してはその支持を失わないように様々な働きかけを続けた。

先述のように政治家と民衆のコミュニケーションの場となったのはコンティオであったため、そうした働きかけも主にその場を通して行われた。例えばオクタウィウス罷免によって

<sup>38</sup> 米本「コンティオの聴衆」、151-155頁。

<sup>39</sup> 平田前掲論文、151頁。

<sup>40</sup> *Plu., Ti. Grac.* 9, 5-6. このティベリウスきっての名演説は *Bernstein, op. cit.*, pp. 169-170 や砂田『「グラックス改革」再考』、1頁等にも引用されている。

<sup>41</sup> *Plu., Ti. Grac.* 10, 1: ...*τοὺς λόγους κατιόντας εἰς τὸν δῆμον <συν>ειθουσιώοντα καὶ συνεξαριστάμενον...* 以下引用する訳文は全て拙訳である。なお訳出に当たっては、村川堅太郎代表訳『世界古典文学全集第23巻——プルタルコス』筑摩書房、1966年; *B. Perrin (ed.), Plutarch's Lives, X, The Loeb Classical Library*, London, 1914; 谷栄一郎他訳『キケロー選集2』岩波書店、2000年を主に参照した。

<sup>42</sup> *Plu., Ti. Grac.* 12, 6.

<sup>43</sup> *Plu., Ti. Grac.* 10, 2; 11, 1; 13, 2-3.

<sup>44</sup> *Plu., Ti. Grac.* 15, 1.

<sup>45</sup> *Plu., Ti. Grac.* 9, 1-2; *App., B. C.* 11, 46.

民衆の間で不満が高まった際には、ティベリウスはその弁明のためのコンティオを開催し、自身の措置を正当化するために弁解演説を行っている<sup>46</sup>。また護民官再選のための選挙の期日が近付き、元老院との対立がより先鋭化すると彼は民衆に対する様々な恩恵立法を提案して支持を集め、さらにその年の護民官選挙で再選を果たせなかった時には、彼はその選挙を中止して一日延期し、その直後にコンティオを開催して涙を流しながら民衆へ助力を請うたという<sup>47</sup>。これらのことから、彼は民衆に対して絶えず注意を払い、その支持に陰りが見えるとすぐに何らかの働きかけによってその回復に努めていたことが確認できる。

また護民官選挙を一度延期した後の様子をプルタルコス以下のように伝えている。

実際、当初はティベリウスにとって素晴らしく有利に事が進んだ。彼が現れるとすぐに民衆は親愛の声を挙げ、丘に登ってくる彼を熱狂的に迎え入れ、知らないものが近寄らないように彼の周りに陣取った<sup>48</sup>。

このように、2日目の選挙が始まった当初はむしろティベリウスにとって良い状況だった。だがその後投票の際に騒動が発生し、身の危険を感じたティベリウスは頭に手を当てて仲間にそれを知らせようとした。それを見た反対派の人々は彼が頭に王冠を求めていると言って彼を排除しようとするも執政官がそれを認めなかったため、反対派の筆頭スキピオ・ナシカとその一味が単独で蜂起して暗殺に向かった<sup>49</sup>。これから窺えるのは、ティベリウスは暗殺される直前まで民衆の支持を失っていないことに加え、敵対する元老院内の有力者でさえ彼を排除することを躊躇うほどの勢力・支持が彼にあったことである。また彼が暗殺された後も元老院は民衆の意向を無視することはできず、改革制度をそのまま継続させたことから、ティベリウス支持の根強さが看取できる<sup>50</sup>。これらのことから、ティベリウスはその暗殺時にも民衆の強い支持を得ていたと考えられる。したがって、概してティベリウスは改革運動の始めから暗殺に至るまで一貫して民衆の支持を保ち続けたと言えるだろう。

だがティベリウスが最期まで民衆の支持を保ち続けたとするならば、なぜティベリウスは1日目の選挙において当選を果たせなかったのであろうか。アッピアノスはその選挙が農繁期に開催されたために地方農民が出席できなかったからであると分析しているが<sup>51</sup>、もしその通りであるならば期日を1日遅らせただけで状況が好転するとは思えないためこの説明は受け入れられない。そこで考えられるのは、元老院による妨害工作である。護民官選挙の直前になると元老院側の抵抗が激化したことは史料から明らかであり、また後のガイウスの護民官選挙の時も元老院による選挙妨害があったことが伝えられているため<sup>52</sup>、ここでも元老院による選挙妨害を想定することは可能であろう。つまり、護民官選挙の1日目の失敗は元老院による人為的な策謀の結果であり、ティベリウスが依然民衆の支持を得ていたことと何

<sup>46</sup> Plu., *Ti. Grac.* 9, 2-9.

<sup>47</sup> Plu., *Ti. Grac.* 16, 1-3.

<sup>48</sup> Plu., *Ti. Grac.* 17, 7: καὶ τὰ γε πρῶτα λαμπρῶς ἀπήντα τῷ Τιβερίῳ, φανέντι μὲν εὐθὺς ἀραμένων βοῆν φίλιον, ἀναβαίνοντα δὲ προθύμως δεχομένον καὶ περὶ αὐτὸν ὡς μηδεὶς πελάσειεν ἀγνῶς προταττομένω.

<sup>49</sup> Plu., *Ti. Grac.* 19, 2-5.

<sup>50</sup> Plu., *Ti. Grac.* 21, 1.

<sup>51</sup> App., *B. C.* 14, 58.

<sup>52</sup> 元老院の抵抗激化: Plu., *Ti. Grac.* 16, 1; App., *B. C.* 14, 58. ガイウス選挙: Plu., *C. Grac.* 3, 3.

ら矛盾するものではない。したがって、ティベリウスはその活動期間中一貫して民衆の支持を保ち続けたと結論できる。

### (3) ガイウス・グラックスと民衆

ではガイウスの場合はどうであるか。前述の通りティベリウスへの支持はその死後も存続していたため、その弟であるガイウスにはその活動当初から大きな期待が民衆から寄せられていた。ガイウスが護民官に初選出された前124年の選挙では、イタリア中からあまりにも多くの人々がローマに流れ込んだために選挙会場に収容しきれず、集まった人々は屋根や瓦の上からその支持を叫んで表明したほどであった<sup>53</sup>。ガイウスは護民官に就任するとすぐに頭角を現し、様々な改革運動を行った。農地分配法や穀物法を制定していくうちにガイウスはその支持を拡大し、前123年の夏には兄が果たせなかった護民官再選を果たす<sup>54</sup>。その後ガイウスは司法制度改革に取り掛かる訳であるが、この時期の様相をプルタルコスに以下のように伝える。

また大衆はと言えば、彼らもその様子を見て驚いていたのだが、それは彼らがいかに多くの請負人、技術者、使節、高級政務官、兵士、文人たちがガイウスを頼りにしているか見たからであった。彼ら全員に対しガイウスは愛想を持って応対し、親切さの中にも威厳を保ち、その各々に対して適切な態度で見事に接していたため、彼は自分を恐ろしい人であるとか全くの恥知らずとか独裁者であるとか中傷する人こそ意地悪い告発者であることを証明した<sup>55</sup>。

この記述からはガイウスが幅広い立場の人々からの支持を獲得していたこと、反対派勢力が窮地に追い込まれていることが窺える。またこの年の終盤に行われた執政官選挙において、彼は民衆の熱烈な支持を得て自身に好意的な人物を当選させることに成功していることから、彼の勢力が極めて強力であったことが看取される<sup>56</sup>。したがって前123年時点で、彼は民衆の非常に強力な支持を獲得していたと考えられる。

だがこうした状況は前122年になると徐々に変化していった。その大きな要因となったのは、元老院によって擁立された同僚護民官リウィウス・ドルススの活動である。リウィウスは市民権法案等のガイウスの改革を破棄しつつ、民衆に対してより寛大な処置を施すことで民衆の人気を獲得し、ガイウスの支持を削いでいった<sup>57</sup>。これらの活動の成果をプルタルコスは以下のように述べる。

現に、民衆は元老院に対し穏やかな態度をとるようになり、以前は貴族たちを疑いと憎し

<sup>53</sup> Plu., *C. Grac.* 3, 2.

<sup>54</sup> Plu., *C. Grac.* 8, 2.

<sup>55</sup> Plu., *C. Grac.* 6, 4: οἱ δὲ πολλοὶ καὶ τὴν ὄψιν αὐτὴν ἐθαύμαζον, ἐξηρητημένον ὄρωντες αὐτοῦ πλῆθος ἐργολάβων, τεχνιτῶν, πρεσβευτῶν, ἀρχόντων, στρατιωτῶν, φιλολόγων, οἷς πᾶσιν ἐντυγχάνων μετ' εὐκολίας, καὶ τὸ σεμνὸν ἐν τῷ φιλανθρώπῳ διαφυλάττων, καὶ νέμων αὐτοῦ τὸ ἀρμόττον οἰκείως ἐκάστω, χαλεποὺς ἀπεδείκνυε συκοφάντας τοὺς φοβερὸν αὐτὸν ἢ φορτικὸν ὄλως ἢ βίαιον ἀποκαλοῦντας.

<sup>56</sup> Plu., *C. Grac.* 8, 2.

<sup>57</sup> Plu., *C. Grac.* 9, 1-7; Stockton, *op. cit.*, pp. 176-177.

みの目で見えていたのに、リウィウスはそうした恨みと敵意を緩和し、解消することができたが、それは自分が大衆の歓心を買って機嫌を取るようになったのは彼ら貴族たちの意見に突き動かされてであると喧伝したからであった<sup>58</sup>。

この記述からはグラックス改革の敵であると認識されていた元老院に対し、民衆があまり反感を感じなくなっていた様子が窺える。このことは反元老院的改革を進めるガイウスにとって痛手となり、実際、ガイウスはこの後護民官三選を目論むも落選してしまう<sup>59</sup>。

またティベリウスの場合と異なり、ガイウスはその暗殺時には既に大体の民衆の支持を失っていたと考えられる。ティベリウスの場合では、未だ彼は現職の護民官として活動しており、その支持も最期まで高かったのに対し、ガイウスの場合では暗殺された前121年において彼は選挙に落選した一私人であり、その支持もあまり高くはなかったと考えられるからである。ガイウス暗殺に際しての民衆の様子をプルタルコス以下のように語っている。

まさにこの時ガイウスは跪いて両手を女神へ掲げ、ローマの民衆が今回の忘恩と裏切りの代償として隷属状態から決して解放されることのないようにと祈りを捧げたと言われている。というのも大赦が与えられる布告が出された時、明らかに多くの者が反対派に回ったからである<sup>60</sup>。

この記述の後半部分には、ガイウスへの反対派の勢力に多くの民衆が加担していたことが記されている。この記述は、この事件が3000人を超える犠牲者を出す前代未聞の大惨事になったことから裏付けられよう<sup>61</sup>。民衆が暗殺に加担したことは、暗殺はあくまで一部の元老院議員のみによって引き起こされたティベリウスの場合と大きく異なる点である。

以上のように、ガイウスの場合民衆からの支持にはっきりとした浮沈が見受けられる。私見では、その分岐点となったものは前122年前半において行われたカルタゴ植民指揮による70日間のローマ不在である。前述の通り、ティベリウスは民衆からの支持が低下しているのを見て取るとすぐに何らかの働きかけを行うことでその支持の回復に努めていた。しかし長期にわたってローマを離れることになってしまったガイウスはリウィウスの扇動による民衆の心変わりに対応できず、結果的に兄が絶やさなかった民衆への配慮を欠いてしまったと考えられる。これこそ、ティベリウスとガイウス各々と民衆との関係が一方では常に協力的であり、他方では最終的に敵対するまでに至った最大の要因であろう。

ティベリウスとガイウスの対比から窺えることは当時の政治指導者は常に民衆に気を配り、その支持の維持・回復に努めなければならなかったということである。裏を返せば、当時の

<sup>58</sup> Plu., C. Grac. 9, 7: ἡμερώτερον γὰρ ἔσχε πρὸς τὴν βουλὴν ὁ δῆμος, καὶ τοὺς γνωριμωτάτους αὐτοῦ πρότερον ὑφορωμένον καὶ μισοῦντος, ἐξέλυσε καὶ κατεπράνε τὴν μνησκακίαν καὶ χαλεπότητα ταύτην ὁ Δίβιος, ὡς ἐκ τῆς ἐκείων ὀρμώμενος γνώμης ἐπὶ τὸ δημαγωγεῖν καὶ χαρίζεσθαι τοῖς πολλοῖς.

<sup>59</sup> Plu., C. Grac. 12, 4-8.

<sup>60</sup> Plu., C. Grac. 16, 7: ἔνθα δὴ λέγεται καθεσθῆς εἰς γόνυ καὶ τὰς χεῖρας ἀνατείνας πρὸς τὴν θεὸν ἐπεύξασθαι τὸν Ῥωμαίων δῆμον ἀντὶ τῆς ἀχαριστίας ἐκείνης καὶ προδοσίας μηδέποτε παύσασθαι δουλεύοντα· φανερώς γὰρ οἱ πλείστοι μετεβάλοντο κηρύγματι δοθείσης ἀδείας.

<sup>61</sup> Plu., C. Grac. 17, 6. 王政転覆以来最初の市民間の争いとされるティベリウス暗殺の際の犠牲者は300人程度であったとされている。Plu., Ti. Grac. 19, 10. Cf. Stockton, *op. cit.*, pp. 197-198.

民衆はただ単に指導者に追従する政治的に無力な存在ではなく、指導者に対して絶えざる配慮を要求する政治的な存在感を有する民衆であった。これを踏まえると、改革の進行に際してはグラックス兄弟と民衆との間に協力関係を想定することができるだろう。そこで兄弟にとっては様々な配慮、対応によって民衆を動員し、そうした協力関係を構築していくことが重要になってくる。次章では、その動員政策について検討を加える。

### 3. 民衆動員のメカニズム

#### (1) グラックス兄弟と弁論術

グラックス兄弟の民衆動員政策としてよく筆頭に挙げられるのは彼らの類まれな弁論術であろう。実際、彼らの雄弁さは古典史料の中でも名高く<sup>62</sup>、また先述のティベリウスによる農地法提案演説などの例は一見すると弁論によって民衆を説得し、政策実現のために彼らを動員しているかのように見える。だがこの弁論が当時の政界において果たした役割についてはミラーによる問題提起以降数々の議論があり、彼らの弁論術を無批判に動員政策と結びつけて考えることはできない。

弁論が民衆の説得に大きく貢献したと考える代表的な論者は、ミラーとヘルケスカンプである。ミラーは前2世紀後半以降政治支配層内部での対立が顕著になった結果、個々の政治家は権力の新たな拠り所として民衆を頼るようになっていったと主張し、その過程において民衆に自らをアピールする弁論が重要になったとする<sup>63</sup>。ヘルケスカンプも、少なくとも前3世紀末以降弁論は共和政ローマ政治の伝統として重視されており、弁論家としての資質は政治家にとって非常に重要であったとしている<sup>64</sup>。また先述の砂田の議論も、政治家同士の競争は民衆への弁論を通じて行われたとしている点において、同じく弁論を重視している見方であると言えるだろう<sup>65</sup>。

しかし弁論による民衆の説得について懐疑的な意見もある。例えばムーリツェンはコンティオの聴衆はその主宰者に対して従属的な社会的立場にあったと主張し、コンティオにおいて行われたのは実質的な政治討論ではなく、政治家個人の権力を誇示するための政治デモンストレーションであったと結論付けている<sup>66</sup>。またモースタイン・マルクスも民衆は政治に関する知識・経験において政治家に劣るために両者の間では平等・公平な討論は行われず、その結果コンティオにおいて行われた弁論は演説者に対して有利なものであったと主張している<sup>67</sup>。彼らの意見に従えば、コンティオ等で行われる弁論は政治的に中立な民衆の説得を目的としたものではなく、初めからやや従属的な地位にある民衆に対する政治家たちの示威行為としての性格が濃いものであったと言える。

ここでグラックス兄弟にとって弁論がどのような意義を持っていたのかが問題となるのだが、彼らの民衆動員策を考察した希少な先行研究にフラワーの論稿がある。彼女はティベリウスが行った弁論に注目し、当時は都市の民衆であっても恒常的にコンティオに参加するこ

<sup>62</sup> Plu., *Ti. Grac.* 2, 2-5.

<sup>63</sup> Millar, 'Politics, Persuasion', pp. 1-11.

<sup>64</sup> Hölkeskamp, 'Oratoris maxima scaena', pp. 11-16.

<sup>65</sup> 砂田「雄弁家と民衆」、241-243頁。

<sup>66</sup> Mouritsen, *Plebs and Politics*, pp. 38-53.

<sup>67</sup> Morstein-Marx, *op. cit.*, pp. 160-203.

とは困難であったこと、また参加できたとしても民衆の熱狂によってその弁論がよく阻まれたことから、コンティオにおける弁論は民衆の動員に対してあまり重要ではなかったと主張する。そこでフラワーが注目するのは当時の民衆の商業組合等の情報ネットワークを介した口頭での情報拡散であり、これこそコンティオにおける弁論に代わってティベリウスの意思を民衆に浸透させたものであるとする<sup>68</sup>。

またここで想起したいのは、グラックス兄弟が高貴な政治貴族出身であったことである。グラックス兄弟の父は執政官を二度務め、最高の荣誉であるケンソル職にも就任している<sup>69</sup>。こうした業績を持つ者の一族は当時のローマ政界においてノビレスと呼ばれ、クリエンテスと呼ばれる庇護民を多く抱えているのが常であった<sup>70</sup>。またティベリウス陣営にはムキウス・スカエウォラやアッピウス・クラウディウス等の非常に位の高い人物も加わっており<sup>71</sup>、彼ら自身にも多くのクリエンテスが存在したためにティベリウス陣営に与する者の人数は非常に多かったと考えられる。実際、プルタルコスがティベリウス暗殺時その味方を「3000人を超えていなかった程度」と記述している<sup>72</sup>。

ティベリウスにそれだけ多くの配下がいたのであれば、彼らがコンティオの開催中何もしなかったとは考えにくい。むしろ彼らはティベリウスが主宰するコンティオに積極的に参加し、ティベリウスに有利な状況を作り出したのではないかと考えられる。ティベリウスの時のコンティオの収容人数が約3000人程度であったことを踏まえると、少なくとも大半はティベリウスの配下の者であったと想定できよう<sup>73</sup>。そうしたコンティオにおいてはあえて弁論によって民衆を説得する必要はないため、彼のコンティオはむしろムーリツェンの主張する政治的デモンストレーションに近いものであったと言えるだろう<sup>74</sup>。このデモンストレーションによって、彼はより多くの民衆の支持を獲得していったのである。つまりティベリウスのコンティオにおいては、弁論は民衆の説得を目的とした実質的な手段というよりも、それによって自身の権威と勢力をさらに高める機会であったと考えられる。

ティベリウス派閥の者で暗殺後の迫害から逃れえた者たちはガイウスのもとへと集まっていたために、このことはガイウスの場合でも同様であったと言える<sup>75</sup>。またそれと同時に、彼に関してはそもそも兄ほどに弁論といったものを重視しなかった痕跡もある。彼も兄と同様に古典史料においては雄弁家とされているものの<sup>76</sup>、ティベリウスの場合と違って政治上重要な場面で行われたとされる弁論はほぼ残っていない。さらにプルタルコスによって「演壇から行う弁論によってよりも人との個人的な付き合いや事業においてより有能な民衆指導者であった」と評されていることから<sup>77</sup>、ガイウスにとっては弁論によって民衆を説得する

<sup>68</sup> Flower, *op. cit.*, pp. 85-100.

<sup>69</sup> T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic*, vol. 1, New York, 1951(=Broughton, *MRR*), s. v. 'Ti. Sempronius Gracchus (53)'.

<sup>70</sup> 安井萌『共和政ローマの寡頭政治体制』ミネルヴァ書房、2005年、167-226頁。

<sup>71</sup> Plu., *Ti. Grac.* 9, 1; Broughton, *MRR*, ss. vv. 'Ap. Claudius Pulcher (295)', 'P. Mucius Scaevola (17)'.

<sup>72</sup> Plu., *Ti. Grac.* 20, 2: οὐ γὰρ πλείονες ἢ τρισχίλιοι περὶ αὐτὸν ἦσαν.

<sup>73</sup> Mouritsen, *Plebs and Politics*, pp. 18-23.

<sup>74</sup> *Ibid.*, pp. 49-52.

<sup>75</sup> 例えばガイウスの改革の有力な協力者であったフルウィウス・フラックスはティベリウスの改革の時からグラックス兄弟に協力していた。Plu., *Ti. Grac.* 11, 1.

<sup>76</sup> Plu., *Ti. Grac.* 2, 2.

<sup>77</sup> Plu., *C. Grac.* 6, 5: οὕτω δεινότερος ἦν ἐν ταῖς ὁμιλίαις καὶ ταῖς πράξεσιν ἢ τοῖς ἀπὸ τοῦ βήματος λόγοις

よりもその実務能力をアピールして民衆を動員していく方が効果的であったとも考えられる。アピシアノスに関しても彼の政治弁論については沈黙しているため、その役割を判断する根拠とはなりえない。これらの事から、ガイウスの弁論が民衆の動員に対して積極的な役割を果たしたと言うことはできない。

以上で考察したように、グラックス兄弟の弁論には民衆を説得するための実際的効力はあまり期待できなかったと考えるべきであろう。ただしこれは当時の政界における弁論の重要性を減ずるものではない。次節で述べるように、弁論には民衆の説得とは別の機能が存在するために政界において重視されたのであった。最後に、グラックス兄弟がどのように民衆を動員していったのかについて考察する。

## (2) 民衆動員のメカニズム

当時において民衆を惹きつける上で必要と考えられた資質に、ディグニタス *dignitas* (威信) といったものがある。安井はこの資質こそ、政治家たちが民衆の支持を獲得するために互いに競合し、誇示しあったものであったと主張している<sup>78</sup>。このディグニタスについては、キケロの『ムレナ弁護』の一節が有益な示唆を与えてくれる。

論敵の選挙不正を論駁する同書において、キケロはディグニタスの諸要素を以下のように分析する。それによれば、まずこのディグニタスの一番の根源はその政治家の属する家柄に付随するもの *dignitas generis* であった<sup>79</sup>。次に政治家個人に由来する資質について、キケロは軍功 *virtus* といったものを挙げており、「最高のディグニタスは軍事的榮譽において傑出している人々にある」と述べる<sup>80</sup>。またこの軍功のほかにも、キケロは弁論における雄弁さも列挙している。彼は「さて人々をディグニタスの最高の地位へと至らしめる術に二つある。一つは良き軍団指揮官の、もう一つは良き弁論家の術である」と述べており、ここからは弁論も軍功と並んでディグニタスの根源であったことが窺える<sup>81</sup>。

グラックス兄弟はこの家柄と雄弁さにおいて特に傑出したディグニタスを有していたと言えるだろう。この意味において、グラックス兄弟の弁論は自身のディグニタスの根拠の一つとして重要であった。ただしこの傑出したディグニタスのみを、グラックス兄弟が多くの人衆を動員して改革を進めることのできた理由として想定することはできない。というのもグラックス改革において対立した者たちもまた、先述の資質において彼らに大きく引けを取る者たちではなかったからである<sup>82</sup>。そこで民衆動員のもう一つの要として想定できるのは、この資質を喧伝する手段である。

前節で述べた通り、フラワーは当時のコンティオの情報拡散能力の限界を指摘し、ティベ

δημαγωγός.

<sup>78</sup> 安井前掲書、141-155頁。ただし安井はこうした資質を「カリスマ」とする。しかしここでのディグニタスの諸相は一見ウェーバー一流のカリスマと相容れない部分があり、誤解を招きやすいものであると言えよう。安井自身これを認識しており、そのため慎重な議論を重ねてディグニタス≠カリスマであることを主張しているが、本稿では紙幅の都合もありこの資質をディグニタスという当時の単語のまま記述する。

<sup>79</sup> Cic., *Mur.* 15-17.

<sup>80</sup> Cic., *Mur.* 24: *summa dignitas est in eis qui militari laude antecellunt.*

<sup>81</sup> Cic., *Mur.* 30: *duae sint artes igitur quae possint locare homines in amplissimo gradu dignitatis, una imperatoris, altera oratoris boni.*

<sup>82</sup> Octavius: Plu., *Ti. Grac.* 10, 1-6. Livius: Plu. *C. Grac.* 8, 5. Cf. Broughton, *MRR*, s. v. 'M. Livius Drusus (17)'.

リウスの時代における民衆間の情報伝達を示唆した<sup>83</sup>。またファンデルブロックは政治家が民衆を動員する場合にその配下に属する様々な階層の者たちによって自身の資質を喧伝するような情報を意図的に拡散させた様子を明らかにしている<sup>84</sup>。ファンデルブロック自身はグラックス兄弟を直接の考察対象から外しているが、先述のように彼らに多くの配下の者がいたことは史料から確認できるためにこうした運動をグラックス改革の時期に想定することは可能であろう。またこうした口頭での情報拡散についてはローレンスやモースタイン=マルクスも共和政ローマ期において民衆の動員に大きな役割を果たしたと考えている<sup>85</sup>。さらにプルタルコスにも民衆の間に拡散された噂話が兄弟の更なる支持強化に繋がったという記述が存在する<sup>86</sup>。したがって、グラックス兄弟が民衆の動員に当たって口頭での情報拡散を重視したことは確かであろう。

だがこれ以外の手段にも彼らが頼っていたことを史料は示唆している。例えば著作物について、プルタルコスやキケロは、兄弟が自身をアピールするための手段として用いていたことを伝える<sup>87</sup>。こうした著作の役割についても考察しなければならない。

著作物と民衆の動員との関係を考察する際に問題となるのは民衆の識字に関する問題である。従来この時期の民衆の識字に関してはそれを低く見積もる見方が優勢であった<sup>88</sup>。だがベストは共和政末期のローマにおいて民衆がローマ市民権の政治的権利を行使するためにはある程度の識字能力が必要であったとして、それが幅広い民衆に普及していたと主張している<sup>89</sup>。またファンデルブロックやモースタイン・マルクスも共和政ローマにおいて幅広い民衆の識字が認められる事例を数多く指摘して当時の民衆の識字率を過度に少なく見積もることに対して警鐘を鳴らしている<sup>90</sup>。またティベリウスの活動の時に民衆が柱や壁に書き付けた落書きによって彼に改革を求めたという伝承もあり、無暗に民衆の識字能力を否定することはできないと言えよう<sup>91</sup>。

しかしそうとはいえ著作物を最後まで読み通すほどの能力が民衆に流布していたと考えるのも行き過ぎであろう。ただし当時の社会的上流層の多くが高い識字能力を有していたこともまた事実であり、そういった者たちを介して、さらに彼らの庇護民たちへその著作の内容が伝えられたことは大いにあり得る<sup>92</sup>。つまり、著作物は間接的に情報を拡散する手段として機能しえたのである。またフラワーの指摘するように、著作物はその時ローマにいなかった者に対して情報を発信する場合にも有効であった<sup>93</sup>。これらを踏まえると、著作物も民衆

<sup>83</sup> Flower, *op. cit.*, pp. 85-100.

<sup>84</sup> Vanderbroeck, *op. cit.*, pp. 23-66.

<sup>85</sup> R. Laurence, 'Rumour and Communication in Roman Politics', *G & R* 41-1 (1994), pp. 62-74; Morstein-Marx, *op. cit.*, p. 250. Cf. Flower, *op. cit.*

<sup>86</sup> Plu., *Ti. Grac.* 13, 4-6. プルタルコスはティベリウスの協力者の一人が突然死亡した際、それが敵対派による毒殺であるという言説が流布して彼の支持がより強まった事例を伝えている。

<sup>87</sup> Plu., *Ti. Grac.* 8, 9; *C. Grac.* 4, 5-6. プルタルコスはこれらの著作を伝記を書く際の史料として引用している。また *Cic. Brut.* 104 にもティベリウスが自身の演説を出版したことが暗示されている。

<sup>88</sup> W. V. Harris, 'Literacy and Epigraphy', *ZPE* 52 (1983), pp. 87-111.

<sup>89</sup> E. E. Best, 'Literacy and Roman Voting', *Historia* 23-4 (1974), pp. 428-438.

<sup>90</sup> Vanderbroeck, *op. cit.*, pp. 109-112; Morstein-Marx, *op. cit.*, pp. 249-251.

<sup>91</sup> Plu., *Ti. Grac.* 8, 10.

<sup>92</sup> Laurence, *op. cit.*, p. 72 において、ローレンスは庇護民への情報拡散が一部の政治家のみによるものではなく、当時の政界一般における重要な要素であったことを示唆する。

<sup>93</sup> Flower, *op. cit.*, pp. 86-87.

の動員に際してある程度の役割を果たしたと言えよう。

演劇や剣闘士の試合等、見世物の開催も当時の政治家にとって重要な拡散手段の一つであった。そうした見世物の主宰者には集まった民衆に対して演説をする機会が与えられたため、主宰者にはコンティオよりもより多くの民衆に対して自らの意思表明をすることができた<sup>94</sup>。フライクによれば、見世物の場は主宰者の権威を民衆に見せつける場であったと同時に、その場においては民会のように民衆の発言が制限されることもなかったために主宰者である政治家と民衆とのコミュニケーションが可能であった<sup>95</sup>。実際にガイウスも見世物の開催を通して民衆の支持を得ようとした事が史料上に確認できるため<sup>96</sup>、グラックス改革に対しては見世物の開催といった拡散手段も用いられたと言えるだろう。

以上から、グラックス兄弟が改革に際して行った動員政策には二つの側面が見て取れる。すなわち、彼ら自身の資質であるディグニタスと、それを喧伝するための情報拡散手段である。本節の検討により、前者に関しては家柄と雄弁さといった要素がグラックス兄弟にとって重要であり、また後者に関しては口頭での情報拡散・著作物・見世物の開催といった手段が彼らによって採られていたと結論付けることができよう。

## おわりに

本稿は近年盛んに研究されてきた政治と民衆の関係の議論から出発し、グラックス改革の進行過程に注目して史料を再考察することで次のことを明らかにした。すなわち、グラックス兄弟と民衆の関係は両者の協力関係とでもいうべきものであり、その関係において潜在的な実力を持つ民衆と彼らに周到な配慮を持って接するグラックス兄弟との相互作用が存在した。そのため本稿は近年提示された、共和政ローマにおける民衆によるある程度の能動的な政治関与を新しい視点から補強するものであると言えよう。さらに本稿はその関係を築くための民衆動員政策を追究し、それにはグラックス兄弟自身の資質であるディグニタスと、それを喧伝するための情報拡散手段という二つの要素があることを示した。またこの過程において従来過度に重視されてきた弁論の役割を再考察し、弁論はあくまでこうした動員政策の一部であると位置づけたが、これはミラーによる問題提起以後政治弁論がある意味で過大評価されてきたことを反省し、それを含めた動員政策全体を考察するために有益であろう。なお本稿はグラックス改革を対象としたが、その動員政策の分析で得られた動員政策の二つの側面の存在、特に後者の情報の拡散という性質については従来あまり注目されてこなかったように思われるため、以後の「内乱の1世紀」の政治史研究についてもこうした視点から改めて考察することが求められる。

<sup>94</sup> Vanderbroeck, *op. cit.*, pp. 77-81.

<sup>95</sup> Fraig, *op. cit.*, pp. 100-127.

<sup>96</sup> Plu., *C. Grac.* 12, 5-6.